

# 曲 川 角

昭和58年3月 第1号

\*\*\*\*\*  
 \* IJSPの論文内容からみた \*  
 \* 最近のスポーツ心理学の研究動向 \*  
 \*\*\*\*\*

関西外国語大学 末利 博

表1 IJSP掲載論文の内容による分類

日本スポーツ心理学会が1973年に発足して早くも10年の歳月が経過した。学会発足の当初その機関誌であるスポーツ心理学研究初巻号に松田理事長が当時のスポーツ心理学の動向について執筆している。その中でスポーツ心理学の研究領域として①スポーツ技術の学習、②発達と運動指導、③精神面のコンディショニングづくり、④スポーツの社会心理学的研究の4領域をあげている。わが国のスポーツ心理学の諸研究を巨視的にみれば、それは今日でもこの4領域に包括できると思われる。わが国のこの研究動向を欧米のそれと比較するために筆者はIJSPに掲載された論文と講演内容の概観をこころみた。幸にもグローブス(D.L.Groves)等がその初巻から7巻までの論文と講演(Lecture)の内容による分類をこころみ、同誌の9巻1号(1978)にスポーツ心理学の研究動向として紹介している。本稿ではその分類基準に従って8巻から13巻までの内容を分類してグローブス等による1巻から7巻までのそれにつづく推移をみることにした。次の表1は1970~76年までのグローブス等の結果をその後のもの(1977~82)と併記して最近における欧米のこの面の研究の重点の推移を明らかにしようとしたものである。グローブス等の分類では各論文の研究目的や表題の意味や問題点等について4人の研究家

領 域 ( Topics )	1970~76	1977~82	
	%	F	%
Aggression	1.5	3	2.4
Attitudes and behavior including selection	10.4	2	1.6
Anxiety	1.5	8	6.8
Competition	6.0	2	1.6
Cohesiveness	1.5	3	2.4
Concentration	4.5	1	0.8
Emotion	3.0	5	4.0
Motivation	7.5	13	10.5
Motor teaching and learning including preparation	1.5	10	8.1
Performance	19.4	6	4.8
Personality	13.4	36	29.0
Psychometrics	4.5	10	8.1
Situational variables- environmental factors and their influence	11.9	4	3.2
Social psychological- status of the art	9.0	2	1.6
Stereotyping	4.5	0	0.0
Others	0.0	19	15.3
計	100	124	100

達による内容判定の一致度等が確められており、分類の妥当性についての配慮がされているが、1977年以降の筆者の分類は著者一人が表題や論文の概要(Introduction)から主観的

に分類したものである。特に同表の Stereotyping はその意味が十分に理解できなかったので筆者の場合は該当論文なしとなった。又最後のその他 (others) はグローブスの表には存在しない項目で、筆者が付加したものである。その項目に属する19個はそのほとんどが講演 (Lecter) で内容が包括的なものである。グローブスの分類と著者のそれとを比較する共通点は Personality, Motivation, Psychometrics の領域が高い%を示している点である。一方異っている点は前者では Performance, Attitudes and behavior Situational variables 等が比較的高い%を示しているが、後者ではいずれも低い%にとどまっている。更に後者では Anxiety や Motor

teaching and learning で比較的高い比率を示した。

この点からすると最近の欧米のスポーツ心理学の研究では態度やパフォーマンス、環境変数の研究が減少し、不安、運動学習、心理測定法等の領域の研究が増加してきているといえるであろう。一方、人格や動機の研究は一貫して高い比率を示し、スポーツ心理学研究の主流をなしているとみられる。グローブス等は表1の分類の外に IJSP に掲載された講演内容やミーティング内容、図書等についても分類をこころみているので、それを参考のために表2として付記した。

表2 Characterization of essays—lectures, Meetings, Books, and Abstracts (1970~76)

Topic	Percentage
Personality	6.5
Performance	11.0
Attitudes and behavior including selection	5.8
Situational variables—environmental factors and their influence	2.6
Cohesion	1.4
Competition	5.8
Psychometrics	7.0
Aggression	2.8
Frustration	1.2
Education and training	5.1
Diet	1.4
Instrumentation—testing, measurement and evaluation	7.2
Documentation	0.5
Research	1.7
Motor teaching and learning including preparation	9.8
Health	1.2
Coaching	4.9
Sport and art	0.9
Sociometrics	1.2
Emotion	2.8
Movement	2.8
Sport	5.6
Physical education	4.2
Special populations	0.2

\*\*\*\*\*  
 \* 九州地区研究会の動向 \*  
 \* \*\*\*\*\*

福岡女子大 佐久本 稔  
 福岡大学 山本勝昭

1972年に九州大学を中心とした福岡地区若手研究会が発足した。運動生理学、運動学、

体育心理学、体育社会学関係の若い研究者達が集まって、年に3～4回の活発な研究会が行われていた。そこでは各専門分野の研究発表、各種学会でのトピックス、大学事情の情報交換など、事前に決められている話題提供者が発表を行ったり、また、大学一般体育に関する共同作業等が行われていた。しかし、時とともに話題提供者、参加者も次第に限定されるようになった。いいかえると、特定の分野への専門分化が進んできた感じであった。

1980年、九州体育学会の組織再編成に伴い体育心理学、体育社会学、体育管理学の各研究者を中心に発足した第2分科会では、年一回、九州地区の研究集会が行われ会報が発行されている(事務局：九大健康科学センター)。

また、福岡地区の心理・社会学を中心とする福岡体育・スポーツ研究会が佐久本らのよびかけで昨年発足し活動を始めている。

ここでは、これら九州地区における一連の研究会の中で提供された心理学関係のテーマ及び発表者を挙げてみることにする。

1. 体育における態度測定の意義(徳永幹雄)
2. 幼児体育について(大滝忠也)
3. 一般体育実技バレーボールの授業研究—コミュニケーションの立場から—(山本勝昭)
4. 運動技術のリズム性について(山本勝昭)
5. 肥満児教室参加者の親子関係(日野明世)
6. スポーツの特性(峯重新二郎)
7. 体育実技に対する態度変容とその要因(橋本公雄)
8. 「なまこ」菊池寛から(佐久本稔)
9. S.F.Buckによる欠損値推定方法とプログラム例の紹介(徳島 了)
10. 運動学習の言語指示について—一言葉に対する学習者の力量調整の検討(大浦隆陽)
11. 運動の短期記憶における位置情報と距離情報(今中国泰)
12. 運動と認知スタイル
13. ボール運動のスキル習得過程—テニス—(則元志郎)

14. Nonverbal 行動をめぐる(佐久本稔)
  15. ジョガーへの心理処方(山本勝昭)
- などである。すべての内容について詳しく紹介できないのは残念であるが、とくに、最近の話題について、二つほど取りあげてみることにする。

#### 1.S.F.Buckによる欠損値推定方法とそのプログラム例の紹介 福岡大学・徳島 了

実験におけるデータサンプリングは実験計画に基づき、欠損値が生じることなく、データ分析を行うことが最も望ましいと考えられる。しかしながら実際の測定では、種々の状態で欠損値が生じ易い。それらの欠損が生じたために、多額の費用と時間を費したデータの一部のデータを捨てたり、分析方法が複雑になるとすれば、やっかいなことである。そこで欠損値を何らかの方法で推定出来ればと思ひ、S.F.Buckによる欠損値の推定方法とそのプログラム例を紹介した。

欠損値の推定方法としては1)測定値データ行列の平均値(行平均、列平均もしくは、行列値の平均等)2)回帰方程式を利用した推定値。3)最尤法による推定値(maximum likelihood solution method)やその他種々あるが、今回のテーマは、2)の回帰方程式を利用した方法である。処理手順としては、1)測定値行列を含まないデータと欠損値を含むデータに分離する。2)欠損値を含まない行列より、分散共分散行列を作成する。3)2)により作成された分散共分散行列より回帰方程式を導き出し、欠損値データを推定する。

今回、実際に北九州市のA小学校4年生(75名)で測定した田中A B式知能検査のI.Q.とM.A.A.TテストのI成功動機(A～D)の5変量(75×5)のデータを使用し、無作為に80データを捨て、欠損値のあるデータとした。そして、もとの完全なデータの場合、欠損値の含まれるデータを捨てた場合とさらに欠損値

を推定値で補った場合の分散共分散行列、相関行列、平均値、標準偏差の値を算出し、比較した。

このデータに関しては、内相関も高かったので欠損値を補って算出した方法が、欠損値を捨てて算出する場合よりも、よりもとのデータに近い値を示した。

## 2 運動の短期記憶における位置情報と距離情報 長崎大学 今 中国 泰

運動の短期記憶に関する研究領域では、上肢の直線運動における記憶手がかりとしての位置情報と距離情報の記憶特性が、この10年間、中心的テーマとして議論されてきた。

これまでの報告によれば、位置情報は中枢で比較的正確にコード化され、忘却されにくく、正確に再生されるということであるが、距離情報は正確な記憶・再生がなされず、記憶の情報源としてはあまり信頼できるものではないと考えられている。このように、位置および距離の記憶特性は、それぞれ独立しているものとして議論されてきている。

本研究では、運動の短期記憶における位置および距離の情報が相互に作用している(Walsh, et al, 1979, 1980)という立場から、停止位置および距離の再生誤差に及ぼす starting position の影響をみる一連の実験を行い、位置情報と距離情報の相互作用について検討を加えた。

これらの実験の結果、運動の停止位置および距離は同程度の正確さで再生され、いずれ

も運動記憶の有効な情報源であるものと推察されたが、いずれの再生誤差も、再生運動の starting position の変化に大きく影響を受けており、それぞれの記憶情報の再生には、他方の情報が少なからず関与しているといった位置と距離の相互作用の存在が推論された。

さらに、この推論をより確かに追証する為に、位置(距離)を手がかりとする場合に、他方の手がかりである距離(位置)情報を全く与えない条件下での実験を行ったところ、再生誤差には位置と距離の相互作用がほとんど認められなくなった。これら一連の実験結果より、位置と距離の両者を伴う運動の記憶に際しては、一方のみの運動手がかりに注意を集中してその記憶を意図しても、他方の情報が少なからず記憶されてしまうことが推察されよう。したがって、運動の記憶は、単一の情報によってなされるのではなく、少なくとも、位置と距離の integrate された情報に基づいていると考えられる。

さて、これまでではどちらかといえば、実際的、応用的研究報告が多くみられたが、最近では、理論構築的研究もみられるようになった。またここ数年前から、積極的な海外研修活動、国際学会(佐久本・山本・徳永・橋本)などが紹介されるようになった。先ほど徳永幹雄氏がイリノイ大で10ヶ月程の研修を終えられ元気に帰国された。氏の今後の活躍が期待される。(文責 山本勝昭)

\*\*\*\*\*  
\* 「ビルマ」スポーツ見聞 \*  
\*\*\*\*\*

### 大阪女子大 山本章雄

私は、1980年11月より1981年5月までの約6ヶ月間、日本バレーボール協会の推薦をうけ、国際交流基金人物交流事業の一環として、バレーボールの指導をするため、ビルマへ赴いた。

ビルマは、東南アジアの一國であり、日本においてその国名は、第二次世界大戦における「インパール作戦」、また、竹山道雄の小説『ビルマの堅琴』などで、よく知られている。しかし、1962年の軍事クーデター以後、

非共産主義を軸とした、ビルマ社会主義の完成を目指す軍政が敷かれ、半鎖国政策がとられたため、海外との交流がほとんどなくなり、以後の国情については十分知られていない。

このように、世界の中で孤立し、独自の路を歩むビルマにおいて、スポーツがどのように行なわれているのかという興味、また、そうした中で、どのような指導をすればよいのかという不安を持って、私は旅立った。

ビルマは、政治的に中立政策をとり、どここの国からの援助も積極的に受けていないため、国の経済は非常に遅れており、国民の生活も貧しいものであった。それ故、高価な道具を用い、特別な施設を必要とし、時間をわざわざ作らなくてはならない西欧型の近代スポーツは、その日暮らしに近い人々にとって無縁と言ってよいものであり、このような人達は、むしろ、庶民の生活から自然に生まれた、伝統的で独特な、そして多くの人が手軽に楽しめる、そんなスポーツを行なっていた。それらの代表格は、「チンロン」「トシトー」と呼ばれるものである。

「チンロン」は、ビルマの国技であり、籐で編みあげたボールを、日本の蹴鞠のように、教人の選手が順番に蹴り上げ、その技を競うものである。また、「トシトー」は、地面に平行に書いた何本かの線上にいる敵に、タッチされることなく走り抜け、成功した人数を競う「鬼ごっこ」のようなものであった。これらの種目は、村や町のあちらこちらで盛んに行なわれ、冬のスポーツシーズンには、町内対抗、職場対抗として多くの人が集まり大会としても行なわれていた。

一方、西欧から輸入された競技スポーツは、政府が国の政策の一つとして、その普及強化に力を入れていた。私も、その強化策の一翼を担うためビルマへ招かれたものであった。しかし、学校教育の中で、「体育」という教科がまだ行なわれていないビルマでは、経済

的な理由も加わって、これらのスポーツ普及には、かなりの困難があるようであった。このため政府は、社会体育の普及を目的とし、保健省にスポーツ体育局を設け、各市町村に1名ずつの「スポーツオーガナイザー」を置き、各種目の普及や地方大会の運営を行なわせていた。また、スポーツ体育局内には、バレーボール、バドミントン、ボクシング、サッカーなど、22の競技団体(なぜかその中には「チェス」が含まれていた)を作り、それぞれの種目の強化や全国大会、国際大会の運営を行なわせていた。また、社会主義国家である有利さを利用し、国営の各企業に有望なスポーツ選手を集め、専門の強化トレーニングだけを行なわせるといった、いわゆる「ステイトアマチュア」の制度も行なわれていた。彼等は、所属する企業での働動義務は全くなく、スポーツトレーニングだけを行なっておればよかったが、その生活は、決して豊かなものではなかった。

このように、ビルマのスポーツには、昔から庶民に受け継がれ、親しまれてきたスポーツと、新しく輸入され、政府によってその普及強化がなされているスポーツの2つの種類があった。

そして、私が6ヶ月間ビルマに滞在し、彼等を指導し感じたことは、これら2種類のスポーツを行なうビルマの人々が、貧しいながらも大らかであり、楽しくスポーツを行なっていたことである。たとえ「ステイトアマチュア」として選抜され、競技力の向上を義務づけられている選手たちであっても、商業主義、勝利至上主義に毒されることなく、マイペースで楽しんでスポーツを行なっていた。そこには、経済的には貧しいが、無理をせず、一步一步独自の路を進もうとするビルマの人々の余裕、また、お国柄を見ることができ、私は、何かを感じさせられ、心暖まる思いがした。

\*\*\*\*\*  
 \* 関西支部体育心理学専門分科会 2月例会記 \*  
 \*\*\*\*\*

1. 軟式庭球選手の意識構造に関する因子分析的研究:

大阪教育大学体育学専攻生 森田ひろ子

月刊紙「軟式テニス」12ヶ月分より軟庭が上達するための条件を中心に軟庭の特徴を表現する2365語いを収集した後、5段階評定尺度法を用いた230項目からなる質問紙を作成、全日本選手権優勝者を含む社会人・学生計420名に調査を行った。因子負荷量は主因子解からバリマックス回転を施して求め、11因子の解釈と命名を行った後、性・ポジション・競技水準の各群毎に因子スコアの平均値を算出、2要因分散分析を中心に群間差の検定を行った。その結果、①競技志向性、②勝ちパターン、③攻撃型後衛、④努力、⑤不器用、⑥楽天性、⑦穏和性、⑧前衛適任、⑨環境不備、⑩顕示性、⑪順応性の各因子が解釈可能であり、とくに①②④⑥⑩⑪の6因子に性差・競技水準差が、加えて③⑧の2因子も含めてポジション差が認められた。

2. 軟式庭球選手の精神特徴に関する一考察

大阪教育大学体育学専攻生 松波欣也

運動適性の中でも心理的検査を用いた精神的側面に関する研究は一流選手を対象としたとき有効な結果が得られているので、本研究においても過去5年間における全日本選手権・世界選手権等優勝者男子19名、女子12名を含む一線級選手48名を対象としてY-G法とU-K法を併用した調査を行った。その結果、①精神安定-適応-外向を示すD型が過半数を占め、B・E型が少ないこと、②他競技における従来の結果と同様に一般健常者集団に比べても尚、精神健康度水準が高いこと、③人柄群別に見ると信念的で堅実・地道で真面目な人間が多いこと、④性別・ポジション別差違があり、女子後衛が堅実さ、粘り強さを

本領とするのに対して、男子後衛は短距離選手同様の反応の速さに特徴が認められた。

3. バドミントン選手の精神的特徴について

大阪教育大学体育学専攻生 高田由賀里

運動適性の一局面として運動選手の精神的資質や意識構造を明らかにする必要性が叫ばれながら、従来の研究方法は心理検査や因子分析を単一に実施したものが多かった。そこで本研究では、種目別適性研究の最も進んでいるU-K法に因子分析法(桑田理丘:バドミントン選手の意識構造に関する因子分析的研究:昭和56年度大阪教育大学体育学科卒業論文)を加えて考察を試みた。その結果、①U-K法からはダブルスよりもシングルスに競技水準別差違が現れ、強い選手ほど適応の速さと反応の敏感さが認められた。②解釈された5因子のうち、とくに第1:競技志向性、第2:試合勘因子に競技水準別差違が現れやすく、全日本総合優勝者が最高値を示した。③優勝者には分裂型が集中し、試合勘に対する強い自信が明らかとなった。

体育心理学会会報

「曲り角」

昭和58年3月31日発行

代表 柏原健三

編集 船越正康

連絡先 〒563 池田市城南3-1-1

大阪教育大学池田分校体育学教室

体育心理学専門分科会事務局

電話 0727(51)8331(内)41